

《第2回センター主催公開講演会》2008年6月27日

## Two For One<sup>1</sup>

—現代日本女性文学におけるアイデンティティとしての妊娠—

Amanda. C. Seaman\*

今日の発表の内容は近代日本文学の中での妊娠の役割、特に21世紀初頭前後の作家がどう妊娠と母性としての立場 (motherhood) を表象し理解して来たかということについて、幅広いプロジェクトの中の一部です。一見、このプロジェクトは作家斎藤美奈子氏を日本の文学批評界の一員として有名にした1994年の『妊娠小説』の後継に見えます。だが、題名とは裏腹に、斎藤の研究は概して、日本文学の中での妊娠の表象、或は妊娠を中心的なテーマとする作品は扱いませんでした。代わりに、斎藤は〈妊娠小説〉という言葉等特殊な専門用語としてある下位ジャンルを批判しました。その下位ジャンルは年上の男性が年下の若い女性と恋に落ち、不倫をし、妊娠させる話である島崎藤村の『新生』が代表的な小説タイプであるようなものです。斎藤は明治期の作家から村上春樹までも扱っていますが、彼女にとって小説が〈妊娠小説〉になり得る決定的な場面は、女性が愛人に妊娠の事実を告白し、その相手の男性の反応が描き出されている、そのような場面です。斎藤が定義する〈妊娠小説〉はいつも男性の視点から語られ、彼の反応や考えに読者の関心を引きよせ、大体の場合、女性主人公は〈役目〉が終わり次第、取り除かれます。

斎藤の研究は重要なものですが、だからこそ大変特殊かつ制限的です。〈妊娠小説〉のもっと幅広い意味をさぐるには物足りないアプローチです。斎藤による〈妊娠小説〉についての規定は、妊

娠と出産が中心的な役割を持つ日本文学の作品の多くを、すなわち小説、短編小説、をも除外してしまいます。特に、彼女の男性作家、男性の語り手、男性視点を中心としたアプローチは、1960年代から近代日本での女性の妊娠、母親としての経験を力強く痛烈に描いて来た津島佑子や萩原葉子のような女性作家の作品を無視し、あるいは簡単な要約ですませています。〈妊娠小説〉はどう定義しても一つのジャンルを特定する数には及ばないとの斎藤の発言は正しいかも知れませんが、『妊娠小説』の中に反映されている以上に、妊娠の文学表象や考えはもっと存在します。私の研究の目的は〈妊娠小説〉をもっと幅広く、総合的に認識する事であり、これらを20世紀後半21世紀前半—女性作家が大半をしめすが—作家が妊娠、出産について作り出して来た多彩な思案とも統合させたいと思います。

これらの理由から、今日の発表で扱う作品は斎藤の研究視野から外された物で、それは単に女性作家であるから、あるいは女性の語りであるからという理由ではなく、父系が曖昧である或は問題にされない作品に集中します。初めに望まない妊娠の結果を扱う幾つかの現代恋愛ストーリーを分析し、作家がどう妊娠を作品の中で利用するか、それはたとえば人生の出来事或は語りの装置としてか、を探ります。それから最後に妊娠が主人公の目標であって、その目標がアイデンティティと加齢にまつわる一連の危機を描く、長谷川純子の『無精卵』(2004)に関心を向けたいと思います。

\*マサチューセッツ州立大学アムハースト校 助教授

\*\*\*\*\*

妊娠とシングルマザーの経験<sup>2</sup>の交差は、野中稔の『チョコレート・オーガズム』(1993年出版。2007年に斎藤美奈子の解説を添えて再出版)、狗飼恭子の『温室栽愛』(2004)と谷村志穂の『白の月』(2004)など、幾つかの女性向けに書かれた人気作品に目立って現れます。世紀末の恋愛小説ブームの一部として、典型的な恋愛小説に綴られる男女の出会いストーリーを超えて情熱的な関係の結末を扱っています。谷村の『白の月』では語り手が妊娠した事に気づき、相手がその(生まれてくる)子供を戸籍に入籍し正当化してくれる事を願います。それに比べ、狗飼と野中の作品の妊娠は語り手の、若く美人で人気者の友達が経験する体験です。興味深いのは、この語り手たちは余りモテない、恋愛が下手な者として描かれていて、彼女等は恋愛関係を見つける事も保つ事もできない者として、不自由無く妊娠した同僚たちと著しく対照されます。

例えば、『温室栽愛』では、美しい桜子は自分の人生相談と妊娠中の危機を乗り越える相談相手として平凡な(ブスな)佐知を選びます。同じく、『チョコレート・オーガズム』ではニューヨークで独立独歩の人生を生きているヒカリが、金持ちの夫を探すためにもっと落ち着きのあるマユミの所に居候します。ヒカリが愛人のなかの独りによって妊娠した時は、予想通りにマユミが彼女を励ましベストリーシェフになる事を応援します。

これら登場人物に共通するのは、彼等の予定外の妊娠だけでなく、子供を産み母親になる事を主張する事です。妊娠中絶や養子に出す事は、日本でもこの選択が受け入れられるにもかかわらず、一回も選択肢として現れません。さらに、その決心は生物学的な事情や情熱的な絶望からきたものではありません。主人公たちは若いので二十代半ば一もし希望するなら、まだ相手を探し、或は子を産む事のできる年数が十分に残っている歳であります。それにも拘わらず、悉く、独立したセ

クシーな女性が選んで子供を産む事は彼女を激変させるものとされ、以前の自由奔放な人格やイメージを捨て人生に激変がおこります。例えば新しい国に引っ越す事や、相手と結婚することなどです(ミサがその例)。迫り来る流産で終わる桜子の場合でも、赤ちゃんが欲しいという欲望は新しい節度(すなわちしらふ)をもたらします。何れのケースでも、妊娠は変化の扉をあけ、そのうえ自己改善と再規定の媒体を与えて、女性に落ち着きを得させ、少女としての生存を、新しい明確に規定された“母親”としての役目とに交換する事を可能にします。

妊娠が作家や登場人物にとって予想外で、余り考察が必要でないものとして現れる繊細な愛と喪失の物語と違い、長谷川純子の物語は典型的な恋愛物語に対する痛烈なアンチテーゼとして独身の女性が妊娠しようとする話です。長谷川のデビュー短編集『発芽』の中の一話である『無精卵』の主人公森子は、午年に子供を生む為、必死に妊娠しようとしています。36歳で独身、森子は行き詰まりにきています。個人的にも仕事に関しても独自性がなく、少女のイメージが中心で自分のような35歳過ぎの中年の女性が“妻”や“母”という伝統的な役割と同一視されている社会の中を彼女はさまよっています。年齢が自分をもう美しくない、魅力的ではないとさせている事を確信する彼女は(未婚女性)(ハイミス)や更に醜い鬼婆になる事を恐れ、母親になる事がその状況から逃げ出す唯一の方法だと考えます。夫を見つける事は無関係であり、運命を全うするためにはただ赤ちゃんが必要なのです。

森子の窮地は珍しくありません。マンガ、アニメ、ゴールデンアワーのテレビ番組やチャートに目を通すだけでもわかる事は、(ポスト思春期)の少女が主人公—美人コンテストの優勝者、犯罪者と戦うヒロイン、戦闘美少女、スーパーヒーロー—、更に理想的な消費者として独占的に噴出しています。少女アイデンティティの美化

(Valorization) は経済的且つ性的な面を持ちます。経済的には、若い独身女性は後期資本主義消費運動と実利主義的自己構成の極点を代表し、性的には少女は無経験、非生殖、従って無限の性欲と一致されています。結婚をどんどん後回しにしている状況の中で（最近の統計で平均結婚年齢は男性が29.5歳、女性が27.8歳です）女性は仕事にエネルギーをより多く費やして、より長く少女として存在します。

この人口統計のデータは独身女性に幾つかの大事な疑問をもたらしています。特に、仕事によって強い独自性（アイデンティティ）を得られず、むなしく感じ、結婚の選択が消えたとき、少女であるには年を取りすぎている女性には何が残っているのか？ どういうアイデンティティが可能なのか？ もっとはっきり言うなら、ポスト少女の独身女性にとって、侮辱的な地位の〈鬼婆〉を避ける為の方法があるのか？ こういふ疑問は、職場で勝ち取った女性の立場の上昇とは裏腹に、若さがマネージャーや人事部にとって貴重な商品として扱われている現代日本にとって、特に緊急のもので、す。年配の女性は若さと美しさを経験より重視する上司に仕事から追い出される事が多いのです。その間にも、日本の労働人口は総合出産率と並行して縮小しています。（現在は女性1人につき1.29の子供）

長谷川自身も中年の、パートの独身ライターとして争った、これらの経済的社会的トレンドは、見込みがない仕事、失敗で終わった不倫関係、と暗い未来を持つ森子にとっても厳しい現実であります。話は森子が若い友人のレイと食事から帰って来た場面で始まります。小さなアパートで彼女は自分の孤独の事、愛人のアメリカへの旅立ち、そして彼女の最近の誕生日の事をじっと考えます。森子は36歳になったばかり、母と祖母と同じく、午年に女の子を生みたい。この目標は一ヶ月以内に妊娠しなければ達成できず、長くつきあっている愛人の青野が遠くにいる事によってより難しく

なります。排卵が近づくとつれ、森子は卵のありありとした夢をよく見、誰かに受精される事に必死になり、次第に低下するレベルの男性の協力を要求するようになります。話の非現実的な結末では、森子は娘のはずの無精卵を産みます。

長谷川のヒロインは結婚はしたくない或はできない女性が、女の使命とされる母親の役割に揺れ動く苦しい状況を体現します。最終的には、長谷川の主人公が直面する問題は〈成熟した少女〉が直面するもので、それは、子供や夫無しで本当に一人前になれるかという疑いをもたらします。森子にはこの問題は36歳になって具体化されますが、36歳という年回りは、十二宮図（Chinese zodiacの場合は「干支」（えと））が三回過ぎるところであって、伝統的には日本女性には不運とされています。つまり、厄年です。夜中じゅう遊んだその翌朝起きて、ポーッと「取れたつけ睫毛を虫の足の様に頬に貼り付けたまま、血豆色のはげちよるなペデイキュアの足を投げ出して」（112）眺めていたら、もう若くない事に気付きます。物語を通して森子は衰えて行く体の事を考え、こけた頬や新陳代謝の衰え等について語ります。でも、誕生日が彼女の生体時計（出産可能年齢）を作動させます。「お腹の中の深いところにタイマーがセットされたのを感じる。そこでは月の満ち欠けと一緒に、私の女の機能がぬめるようにのたうちまわっている」。このタイマーはあまりにもうるさくカチカチと音を立てるので彼女は独りで居られないくらいで、人や音でかき消すことしかできません。

森子はオフィスで最年長の女性社員で、〈伝説のお立ち台〉として会社の男性社員に思われていると思込んでいましたが、同時に「一応そこそこ大人のちゃんとしたお姉さま」に思われている事をも認めています。それに比べ、女性社員には自分の賞味期限や性的魅力で評価されているだけだと信じていて、彼女たちには当然年上なので性的な関係が無いと決めつけていると思こんでい

ます。

可哀そうにねえ、三十過ぎお局。セカンドバージン十年生、危ないねえ、と会社の後輩に噂される筈だ。(112)

長谷川が明らかにしているように、殆どの性的不安は語り手の自分の体に対する低い自己評価に由来しています。年をとるにつれ、森子は自分の体が男に性的に魅力的ではなく見えていると信じ、その考えは36歳の誕生日寸前に青野に振られた事で確信されます。森子のこの信念はあらゆる好ましくない男性の搾取的な行為や要求に利用されやすくなるという結果をまねきます。こういう接触は若い同僚内木とのそれが典型であります。内木は青野との関係が終わった事を知り、彼女の新しい性的友人(愛人)になる事を提案します。職場で彼と性的関係を持ったことが噂されるようになったとき、内木がカウボーイのように彼女の事を悪くいう人に勇敢に立ち向かうのではという森子の幻想はすぐに消滅し、悔しい思いで気付いた事は、職場の同僚が思った事は、彼女が「頭おかしくなった可哀そうなお局」(139)ということだったということです。

内木との密通は妊娠をする事に動機づけられ、決められた期間のものと森子は見えています。だが、内木とセックスをする気持ちになるのは、性的に成熟している女である確信を持ち続けたいという彼女の窮地を表しています。歳をとるにつれ、彼女は男に性的対象あるいは結婚相手としても見られなくなり、職場の年下の女性の同僚には(封印されている)と思われています。しかし、森子は自分の性的欲望には強い確信があり、それは、安定した関係の中で定期的にセックスができる事として現れます。彼女にとって残酷な事は、女性が歳をとる事は男にとって性的対象でなくなる事、そして、それを拡大解釈すれば、男は女性の性行為への接近を決定することで女性の性欲をコントロールすることができるということです。

森子の自己不安は予言的です。誕生日のあと

上司(青野)が彼女との4年間の不倫関係をやめ、その後彼女をクビにします。無職では生活が長く成り立たないにも関わらず、森子の中途半端な就職活動は面接には繋がりません。ある面では、森子の不真面目な就職活動の原因とは、午年に子供を産みたいという欲望で、起きている間中、彼女はその目標に支配され始めます。でも、それと同じく問題なのは森子の年齢です。日本では、女性が仕事をするのは結婚するまで或は妊娠するまで、子供を育てる為にやめると思われています。その結果、日本の企業は能力より若さを重視し、大抵サポートの役目を果たす女性社員は代替可能な者とみられ、若い女性社員はより安い給料で雇えると見られています。

しかし、森子の歳は彼女自身により私的な面で影響します。誕生日を嘆き、消極的に言う言葉は「三十六歳はマリリン・モンローが謎の死を遂げた年。ダイアナ妃が再婚直前に事故死した年。作家の鈴木いづみが自殺したのも三十六歳<sup>3</sup>」です。これらの女性は皆、性的にも芸術的にも、魅力のピークで亡くなり、永久的に歳老いることを除外できました。確かに森子にとって、芸術的表現より美しさで評価されたダイアナ妃やマリリンモンローは鈴木いづみとは違う意味を持っています。ですが、美的且つ性的ピークの時期に亡くなった(死ぬ事を選んだ)二人は森子に強い印象を与えます。

中年になる事は代謝作用が衰えることを意味し、森子は体重を気にしはじめ、人気のダイエットにひっかかりやすくなります。体重削減の為に選んだ巨大な量のタピオカプリンを食べながら、森子はそのあやふやな甘さについて「うすら甘くて実体なきかのようなボケた味。我が青春のごとしだ」と言います。だが、青春とは、どんなに欠けた物でも彼女を誘惑する妖婦の歌であります。長年の、自称パーティーガールとしての、また数多い性経験にもかかわらず、森子にとっての青春の歌の主旋律はロマンスです。80年代はそのロマ

ンスの音色は、『青い珊瑚』、『パラダイス』、そして『リトル・ダーリング』という西洋映画にも現れ、純粋な恋と性的目覚めを物語ります。『無精卵』の中では、ぼんやりしたハリウッド式の初恋を経験したいという幼げな欲望と分別のない主張が、彼女の人生全体に影響をもたらしています。確かに、この幻想には西洋映画を輸入する会社に働いている事も影響していますが、森子の青春時代にルーツがあります。まだ見続けている映画は若い頃に見た映画であり、学校を休んで映画館に坐ってあらゆる恋愛の謎を追体験した映画でもあります。森子がいうように、映画の中のセックス、特に、女性の〈初めて〉の経験を表象する〈ファースト・タイム〉映画は自分が経験したものとはほど遠いものです。「もちろん絶対腰動かしたり、フェラさせたりなんて生な描写ないから、私、自分が体験するまで、セックスって「入れたら終わり」だと思ってたんだから。」(119)。

森子はロマンス映画を人生の理想のモデルとして見ていますが、彼女自身の人生はこのロマンス映画の散々なパロディーです。ロマンスは恋に落ちる事を語りますが、幸せな結末が約束事です。それはまた、少女によって楽しめる人生の期間の延長でもあります。けれども、物語の設定の範囲の中ではロマンスのヒロインはいつまでも少女のままで、「次」に進むことはなくあらゆる現実では会うはずの絶望とは巡り会いません。森子はまだ何年か子供が産めるはずですが、日本での所謂〈恋愛結婚〉というものの可能性はゼロに近い事を知っています。結婚がしたければ、残った選択は御見合いで、それはバツイチか性的経験が無い男性とです。森子には、自分がめり込むロマンス映画の記憶は彼女の現実から逃避させてくれ、青野が戻ってくれる可能性をいつまでも持ち続けさせてくれます。

次第に生活が壊れて行く中、森子は映画のヒロインにより強く感情移入します。「今や主人公の少女達も、私と同じ賞味期限切れ寸前、崖っぶ

ち女の年齢の筈なのだけど、純真な処女のまま…。なぜか自分もぼやぼやと安心した気持ちで余裕なのだった。」(140) 最後には、彼女は子供ではなく、青野とのハッピーエンドが欲しかっただけだった事に気付きます。青野は彼女とは縁を切った事ははっきりしていても、彼女はまだ彼が自分を追いかけていた時期の記憶にしがみつiki、それを語る彼女の言葉はロマンス映画の言語と歩調を思い浮かべます。

先に来て待ってくれた彼の顔色。沈んで暗い鬱積した懇願の色が忘れられない。

青野さんは私を見てこう言った。(躊躇わないでよ。森子) 血の引いた冷たい指を握られた時、もう逆らわなかった。純愛映画なら、そこでハッピーエンドである。私はそれから四年間、長いエンディングを覗つづけていただけだ。(141)

自分の状況に対する暗い知覚は彼女の次第に汚れて行くアパートによって示され、それを彼女は誰も入りたがらない「ごみため」や「暗い洞窟」と描写します。それは彼女の子宮の状況と同じで、男性の訪問客をむなしく待っている「女の廃屋、股の下の蜘蛛の巣城って幸薄い境地」(112)なのです。後で長谷川は異なる、だが類似する隠喩でこのイメージを使用します。それは、森子がお風呂で自分の〈年老いた〉体を〈在庫調査〉する場面にあります。

指先で下腹をまさぐり、柔らかく押してみる。脂肪と肉の甘い弾力。そっと指を滑らせれば、草むらの奥、南洋の孤島、日のささぬ湿地に息づく世界最大の隠花植物ラフレシアのごとく、グロテスクな分厚い花びらを陰気に開いた我が器。シダに囲まれた暗い湿家帯の中で、花粉をキラキラとさせ、ラフレシアのはなびらがあだっぽく笑う。(116)

ここでの長谷川の植物隠喩は印象的です。ラフレシアは巨大な花で直径1メートルもあり、10kgほどの重さになります。寄生的植物で葉、茎、

根っこがなく、つる草の宿主の根っこから9ヶ月かけて育ちます。一旦花を咲かせたら、その花は一週間だけ咲き、受精が可能な期間が短く、シデムシによって達成されます。さらに不気味な特徴は死骸の腐った匂いが〈死骸植物〉とのラフレシアの広く知られる名称の由来だということです。話が進むにつれ、森子の妊娠への探求の主人公となるのは、この花と重ね合わされた外陰部です。

森子のラフレシアの狙いは〈受精〉であり、この植物的過程を動物的に且つ根強く追います。お風呂に入っているときは花に話しかけられます。「ほら、もう間がないよ、早く受精しなくちゃ」。(116) 花に促進されているのに気づき、止める事ができません。ある時、森子が妊娠させてくれるという同僚といちゃついていると彼女は、「タンポポの綿毛じゃないんだから」(124) といいます。更に、他の職場の人とセックスをしているときにまたその花の妖婦の歌が聞こえてきます。「ざわざわと私の腹の奥、ラフレシアのはなびら達は蠢き出す、ぼってり膨らんだ肉の門が受精の期待でさらに膨れ上がりくいぞ、やれ」と勧めます」。(135) 森子はこの相手との関係には深い不安を抱きますが、彼によって妊娠しないと、ラフレシアは「あーあ。がっかりした」と溜め息をつきます。(137)

長谷川のこの花のメタファーの使用は、物語を通して科学的なイメージと言語を動員する戦略の一例です。この使用はロマンス映画や十二宮図を人生の指針としている森子と対照され、一つの代替物語装置となっています。特に長谷川は森子の性器や妊娠への努力を描写するとき、植物や人工遺伝学をも含む、生物学的言語を使用します。この科学的ディスコースは、しかし、感情的な目的を持っており、森子が本当に愛している男と妊娠できない事の悲しみを除く役割を果たしています。これは、女の子の赤ちゃんだけでなく、自分と同じB型血液でなければいけない事にも現れます。元愛人の青野はこの条件にぴったりでしたが、

森子の子づくり計画を聞いてセックスをする事を断りました。森子は青野を切望しながら、他の候補を探し、三上という男性に会います。彼は最近娘が産まれたばかりで森子にも娘を生ませる精力があるといいきります。アサヒコムのネイチャーニュースでみたドキュメンタリーでは電磁波によく放射された男性は娘を産ませることが多いと主張までします。「要はねえ、電磁波を浴びるか浴びないか。コンピューターの液晶とか見てると女の子が産まれた。僕SEだからほぼ百パー、午年の娘産ましてあげるよ」(125)。残念ながら、彼は口だけで、行動には達しません。次のB型の相手は内木であり、彼は良心的に妊娠させる事をさげ、森子の口の中に射精します。この行動は文字どおりにも比喩的にも外的外れです。

内木が口の中で射精した時の絶望は二つのレベルで大切です。彼女は妊娠する為にこの精子は必要であり、そして、彼の膈外射精は彼等の微妙な関係をも表しています。女性身体内での膈内射精は〈レディースコミック〉ではカップルの愛の絆の象徴となっています。彼女は彼によって妊娠したいと思うほど愛している、たとえそれが中絶で終わっても。この人気作品の中のありふれた物語比喩は、森子が内木によって妊娠しなかったことに失望したにもかかわらず、何らかの親しみを彼から得たかったことを表します。確かに、この時に森子が明らかにするのは、青野も彼女をそういうふうにしたさなかつたことで、それは青野が彼女を本当に愛していなかつた事をあらわすのです。

植物のイメージをよそに、長谷川の作品の支配的象徴は、タイトルでお分かりのように、卵です。森子はどこを見ても卵に囲まれています。朝のお日様は「卵黄色」で、友人の白目は「潰れた卵の黄身色」(123)。そして卵らしい物がアパートから職場、そして帰り道にも彼女の前に出没し、嘲ります。朝、食べるタピオカの陶器の中にもボールのような魚の卵が浮いています。青野からの誕

生日プレゼントも36個のゴディバトリップが「りちぎ」に並んで自分の歳を思わせ、彼等の敵でもある「ピル」にも似ています。トリップはクリスタルの花瓶と不調和な贈り物に見えて、独身のパーティーガールには不釣り合いでもあります。比喩的には意味があります。森子は自分の子宮が暗い洞窟やグロテスクな場所だと想像していますが、透明な花瓶はそれと正反対です。それは完璧で美しい子宮、花（それは死んだ物）を持つためにデザインされたものです。

一番鮮明な卵の象徴は森子の夢の中で起こります。フロイト的な比喩にあふれながらそれは森子の誕生日に始まりそのあとも彼女の性的履歴を再現します。初めの夢では、森子はある見えない男に一つの卵を渡されます。その「赤黒く膨れた逞しい腕」に集中しながら、その腕の太い血管が「葉脈」(175)のように見え、自分は手の中の卵に掛けている圧力に気付かず、割ってしまいます。黄身が地面に落ち森子の裸足の足の指に飛びちり、白身は手に付き硬く乾きます。男の腕は男根の象徴として間違いないですが、それと卵が壊れた性行為の結末も彼女の遊んでいた時代を思わせます。第二の夢はラフレスシアの花びらが開く夢で、森子は水に囲まれている気持ちになります。森子は「肌につくとべたべたする、青臭い花汁の匂いで息苦しい」ことを認識し、自分の子宮の中の観光客になっている事に気付きます。(126) またこの夢でも彼女は卵をもらい、今度は壊さずに感情と思いやりを持って手に取っています。「白い卵はあどけなく丸い形で、濡れた先っぽを光らせている。ふと口を含むか乳首にあててみたくなる、エロチックでいい形だ」(126-27)。前に卵を壊すなといった声が今度は「それはお前が産む卵だ」「三月の第一週だ」(127)と報告します。

この予言をもって、森子は新しい相手を、青野を思い焦がれながら、探します。内木とセックスをした後、彼女はいくつもの卵をぶつけられている夢を見、パニックに落ちます。

フランスの中世の刑罰に遭っている。広場に据えられた木の棒に縛られて、ジャンと銅鑼が鳴る中で、群衆は私めがけて石を投げつける。石つぶての刑。いや、卵だ。パン、パン、と勢いよく飛んで来た卵は私の体にあたっては潰れ、たちまち黄色いドロドロまみれになった。生臭い匂いが立ちこめ、私は眼も開けられない。やめて、やめて。もったいないわ。受け止められないじゃない。見当違いの叫びをしながら泣く。目の前が黄金色と血の混じり合った不気味なマール模様になった時、私は恍惚のゆらめきの中にいた…。(137)

これらの夢の事を考える時、森子はその性的な意味には無関心ではありません。子供を生む事に対する戸惑いよりも、よそにいる青野とのセックスが無い事によってだと思っていて、卵による〈石投げ(の刑)〉を内木と寝たことによると解釈します。この卵の解釈は最後の夢まで持ち続けられますが、その時に彼女はこれらの夢が性的な内容ではなく、出産に関する夢だと気付きます。この自覚はシモン・デュ・ポーヴォアールの指摘を思い起こさせます。“woman adapted to the needs of the egg, rather than to her own requirements.”<sup>4</sup> 子供を産むことに対する自分の戸惑いを表すものは夢のなかの男の声であり、この声は森子の生殖の運命を支配する家父長制社会かもしれません。

青野は最終的には戻って来ません。他の女性を妊娠させたことで身を隠したと噂されていて、森子は憂鬱に陥ってしまいます。次第にゴミだらけのアパートにいる時間が増え、三月の排卵の時期を待ちます。排卵するはずの夜、彼女は最後の夢を見、巨大な卵を孕みます。「私の洞は巨大な卵に満たされていて、ゆっくりと壁を押し広げ出て行こうとしている。圧迫された壁は細かく律動して苦痛に耐えている。」(142) 森子が赤ん坊の大きさを取った卵を押し出そうとすると自分の子宮の壁に覆われる気持ちになって、彼女自身が同時に産まれる卵であり、産む女でもあり、最後に

「ほら、もう頭が見えたよ」との叫びで小説は閉じられます。(142)

\*\*\*\*\*

母と祖母の後に続きたいと言いつつも、森子の子を産みたいという欲望は人生の方向についてパニックに陥っていることによっています。もう若くなく、結婚の相手もない、次の人生の段階にどう動き出せばいいのかわかりません。典型的な粗筋では、少女、妻、或は母という役割に落ち着くはずです。その結果、少女の人生を長く持ち続けた森子には子を産む事で大人になるという選択しかないと思ってしまう。しかし、生殖という植物的義務に関しては曖昧な気持ちをもっています。それは、彼女が本当に欲しいものは手に入れない男との子供で、彼女の曖昧さは性的欲望を生殖目標と分離する事ができないことから生じます。彼女が言うように、「女なら誰だって、女の廃屋、股の下の蜘蛛の巣城って幸薄い境地に、たった一晚お預けくらっただけでも、容易く落ちちゃうものなんだから。しっかりずぶずぶに愛されちゃって骨の髄までぬくまって弛緩している女だけが「セックスって面倒くさいわあ」なんて言っているのだ」。(112-113)

あらゆる面で、森子は出産を、文字通りにも象徴的にも、社会によって、自分自身によってそして社会的状況によって拒否される自己満足や自尊心を穴埋めする為に利用しています。森子の選択は、母性としばしば結びつく複雑さや妥協を考えたら不思議かもしれませんが。独身の母親は、長い間、社会的不名誉的であり、これは〈妊娠小説〉で語られる〈間違いを犯した女〉(fallen woman or one who has gotten into trouble sexually) たちに現れます。結婚の中でも、出産する事は女性のアイデンティティを大きく変え、社会経済システムに参加し続けたい女性には有害な影響をもたらします。妊娠した身体を公に見せた瞬間から女性の主体性は裂かれ、体に対する決断に対して尋問され、

社会の目にさらされます。これによって女性は外からの抑圧、そして自分の行動、選択、体に対する批判に堪えられず、妊娠したら仕事をやめます。一旦子を産んだ女性のアイデンティティはまったく変わります。性的に熟した人間よりも、母であり、自分の欲望や希望よりも次の世代の利益を増やす事に専念しなくてはいけないという使命を得ます。アメリカでは、女性は出産したあとに、前の仕事に同じレベルで戻る選択が有りますが、日本では、自分が同じキャリアで残ってられる未来は見えませえん。ですからパートの仕事やフリーランスの仕事をする。これらによって、母親になることが表す、不確実な仕事の将来を与えられることを考えると、若い女性が急いで妊娠したがる気持ちがよくわかります。

しかし、森子には、他の恋愛小説の中の若い女性と同じように、仕事に対する満足感や出世は大事ではなく、語られないし、魅力的でもありません。野中、狗飼と谷村の作品では現実的な生活は粗筋の中には現れません。女性登場人物は無職であらゆる相手の男性の気前の良さに頼っています。森子にとっては、仕事はストレスと絶望の基で自己満足や出世には繋がりません。職場の所謂(ガラスではなく)加熱硬化性合成樹脂(フォーマイカ)の天井の下から出られず、彼女の〈キャリア〉はどこにもたどり着けないと彼女には見えます。これらの女性それぞれにとって、妊娠は寄り道ではなく、高速道路の出口であり、彼女等をもっと新しい、暗黙にはもっといい道に連れて行ってくれるものであり、これは、長谷川の話の一人称の語りと精神的繊細さに見えます。

この〈出口〉は大いに自己中心的な旅立ちで、それぞれの作者が登場人物の女性の欲望や目標にこだわるところに見え、相手の男性は、お金持ちのボーイフレンド、或は間抜けな同僚といった典型的な登場人物であります。長谷川作品の中では彼等は植物的過程の道具の一つとしてのみ存在します。更に著しいことは実際の妊娠の結末(所謂

子供)が消失していることです。代わりに、彼女等は妊娠を主体的な、自己に言及した、みずから決定した行動として扱っています。妊娠は自分のために自分だけで参加する物になり、家族を作ることや、子供を作る事ではなく、新しい自分を作りだすきっかけとなります。この新しい自己は〈妊婦〉であり、それ以外のものではありません。内面化されて、非常に唯我論的に、彼女たちが進める妊娠には母親の立場はなく、女性は制作者としてではなく運搬人としてのみ理解されます。

このイメージは肉体的にも、隠喩的にも奇妙です。容器として考えられているときでさえ、妊娠した女性は、彼女が運んでいる「中身」と切り離されることはできません。言い換えると、新しいアイデンティティと新しい身体は彼女とともにあるものでもあり、また区別することができるものでもあるのです。その結果、ここで示された自己創造は新しい、開放的な可能性を見いだす事はできません。それは妊娠という〈選択〉が制約されたもので制約するものでもあるからです。例えば森子の決意は、外部の条件や要求によって起こったものです。女の子を午年に産む家族の〈伝統〉は彼女が一生を過ごす相手を見つける前に妊娠を要求し、一方で仕事や私生活の中の不満は彼女に変化ややり直しの選択を妨げます。そのせいで、森子や他の人が作り上げた〈自己〉は根本的に関係性のもので、子どもが表象する未だ知られていない、だが密接に関係がある〈他者〉によって定義されます。確かに、子を産む決心は取り返しのつかない物で、社会的地位を一生変えてしまう結果をもたらします。一回母親になったら、一生母親なのです。

独立の喪失をもたらすこの決断は恋愛小説の中では削除され、これはこのジャンルの根本的にロマンチックで非現実的な面にふさわしいと言えます。だが、長谷川の物語は母親という現代女性の中での非常に問題のある役目がより微妙な物であることを認識し、最後には森子がとらわれている

少女—母という文化的二項対立の〈いずれを選ぶか〉という選択とは違う選択を持ち出してくれます。最後の鮮やかな夢のなかで、森子は執拗に子宮が生殖しなくてはいけない卵を放出しようと力んでいます。出産のグロテスクなパロディーのなかで彼女は、この卵は自立した生き物(子供)というより、自分自身以外ではないと気づき自分自身の未来の可能性に向き合います。

それゆえに、けっきょく、妊娠によってアイデンティティを変えようという森子のもくろみは、現実離れしたものであったことがあらわになります。卵は産めるが、子供は産めない、という困難は子供に対する幻想ではなく、満たされていない原点の記号化です。森子にはまだ繁殖力があります。しかし、彼女の母親になろうという道は、無意識のレベルで、彼女がそのゴールを得るために愛情行為や満足を犠牲にすることができないという彼女自身によって阻まれます。母親になりたかったにもかかわらず、妊娠を達成できなかったという事実にもかかわらず、彼女の最後の卵の夢は別の可能性を示しているといえます。

子宮の生物学的規範にも縛られずに、産まれてくるもの、それこそ本当の独立した自己なのです。

#### 注

- 1 「一つの値段で二つ買える」のフレーズで良く使われる。
- 2 Is there a better word for this, I wonder. シングルマザーフード maybe, the concept of "hood" is a bit tricky. I use "experience" here, but it's also just "life of". I was hoping there was a word for "single mother" in Japan - strange that there isn't.
- 3 Suzuki Izumi (1949-1986) began her career as a model and soft-core pornography actress. After moving to Tokyo in the late 1960s, she began to write fiction and essays, and was nominated for several literary awards, although she is best known for her science-fiction works. Suzuki was the widow of avant-garde jazz saxophonist Abe Kaoru (who died at 29 from an overdose), and hanged herself in February 1986. On her career, see *Suzuki Izumi 1949-1986*, ed. Nishimura Tamami (Tokyo:

Bunyūsha, 1994).

4 Simone de Beauvoir, *The Second Sex*, trans. H.M.

Parshley (New York: Vintage, 1974), 32